



樹蔭静け

北海道帯広三条高等学校
〒080-2473
北海道帯広市西23条南2丁目12番地
TEL: 0155 (37) 5501
発行日 令和3年8月31日

緊急事態宣言下での教育活動について

校長 合 浦 英 則

8月27日～9月12日の期間で「緊急事態宣言」が北海道に発令されました。学校として改めて感染症対策に努めてまいります。また、生徒諸君にも自覚ある行動を求め、27日には、部活動代表者に部活動での対策の徹底をお願いしたところです。

また、学級閉鎖や学年閉鎖の指針も出されましたが、本校ではICTを活用したオンライン授業の試行を既に行っています。これは教室にクロームブックを配置し、それを利用して授業ライブ配信を行うというものです。過日生徒に取得をお願いしたグーグルアカウントを用いることで、家庭からも授業に参加できる仕組みです。クロームブックの位置や教材の配信、家庭で視聴する生徒へのフォローの方法など課題はあるものの、十分有効な方法であることがわかりました。今後も試行錯誤を重ねながら、授業を長期間欠席することの不安払拭に努めてまいります。

今まで私たちは、学校は多少無理をしてでも通うものという認識であったと思います。私も教員時代、それくらいで休むなど言ってきました。しかしながら、現在の状況ではその考え方を考える必要があるようです。今まさに、『熱がなくても風邪のような症状が少しでもあるのなら欠席する』行動様式に転換しなくてはなりません。改めて、自分のことを守る、他人のことを守る、人への思いやりを学びながらコロナ禍での人としてのあり方、生き方が求められます。皆さんのご理解とご協力をお願いします。

放送局、全国総文祭ビデオ部門最高賞獲得

8月2日から和歌山県かつらぎ町で行われた全国高等学校総合文化祭・ビデオメッセージ部門で見事、最高賞である優秀賞を獲得しました。通算4度目の受賞となり、北海道で初の快挙です。

本校の作品は『時速5kmの雪景図』。中札内村在住の梶山智大さんのスノーアートの制作からイベントまでを取り上げた作品で、3年1組下里佳輝君がこの5分のために足かけ3年をかけた力作です。全道大会2位でしたので、より完成した作品にしようと最後まで手を入れ、梶山さんの家族の姿も入れて作品に厚みが増しました。その甲斐があつての最高賞の栄誉に下里君も歓喜。作品の上映中の観客の反応がよく、手応えも感じていたようです。実際、上映終了後すぐに多くの高校から『素敵でした』『どうしてあんなにすごい映像が撮れるんですか』『作品交換させてください』などのオファーが殺到したということです。

昨年はコロナの影響で開催できなかった総文祭でしたが、直接観た人の反応を感じられることや、お互い顔をあわせて交流ができたことが大きな喜びだったようです。全国のレベルを肌で知り、全国の仲間たちとこれから情報交換しながら切磋琢磨していくことが今後生きていくものと思われまふ。今後の活動にぜひご期待ください。



CLASSプロジェクト

三条・グローバル・ゲート (SGG) 英語活用能力向上目指しスタート

2年次探究の時間で、英語でのコミュニケーション能力向上を目指して、イングリッシュスピーカーとの交流活動を実施します。題して三条・グローバル・ゲートウェイ。

その第1回目は、まず英語を使う心構えが大切ということで、本校のOBでジョイ・イングリッシュ・アカデミー学院長、小樽商科大学特認教授の浦島久先生を招き、『そして、英語はあなたを変える！』と題する講演をしていただきました。

英語によって変わっていったご自分の人生を振り返りながら、英語を学び、使うことの重要性をお話いただきました。

その中で先生は、「英語の上達には性格・知識・経験が関係してくるが、大事なものはなぜ英語を学ぶかという動機付け。大学受験のためだけならもったいない。ぜひ英語を使えるようにしたいと心構えが重要である。また、英語は自分で発音出来なければ聞くことはできないし、読めるものは聞けるものだといったうえで、勉強法として音読が最適だということ、さらにe-mailが普及した現代では話す以上に即座に書いて返事できる力が重要である」と時に熱く、時にユーモラスを交えて語ってくれました。

今後、英語での交流に向けてグループで準備を進め、10月22日に十勝在住のイングリッシュスピーカーの方々との交流活動を実施します。

最後になりましたが、浦島先生からご自身の英語図書や写真集を寄贈していただきました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



第14回 2-4担任・放送局顧問 安藤 佳寿哉 教諭

自分が足を運んでわからないことを拾う

◆英語の先生なのに情報の先生？

私は三条高校卒業ですが、当時は理数科がありました。そのせいでと思うのですが、大きな電算機を生徒に解放していました。電算機というのは、今のコンピューターのことです。たぶん今の生徒たちには想像もつかないと思うのですが、大きさは家庭用大型冷蔵庫ぐらいで、モニターもなく、ただ紙がプリントされて出てくるという代物でした。友達と一緒にプログラムを勉強して、自分たちでゲームを作って遊んだものでした。大学は文学部に進んで英語を勉強しましたが、ちょうどパソコンが普及していく過渡期でしたから、引き続き興味があってISNという、インターネットのはしりのような関係のアルバイトをしたこともあります。それが昂じて、教員になった後に情報の教員免許をとることになったのだと思います。

◆洋裁学校でデザインを学ぶ！

大学では英文学を学びましたが、社会学やジャーナリズムも学びました。当時の時代の先端を走っていた気鋭のジャーナリストである本多勝一とか筑紫哲也などの錚々（そうそう）たる講師陣から学び、自分もマスコミを志望していました。大学在学中は、業界紙でしかたれどアルバイトとして主に校正などの雑用をしていましたが、時には取材にも連れて行ってもらったこともあって、某通信社の就職試験を受検したのですが、残念ながら3次試験で落ちてしまいました。それで次は洋裁学校に通って、服のデザインを学び始めました。ニットのデザインを手がけて、ヴォーグ社のファッションショーに3

作品を出品したことがあります。三原山の噴火からイメージしたニットセーターです。1点はものすごく評価が高くて、28万円の値段がつきました。当時の北海道教員の初任給は14万円でしたから、これはデザイナーの方が儲かるなと（笑）。

◆焼き直しはダメ。オリジナルにこだわる！

教員になったのは大学関係者から北海道の私学の講師職を紹介されたことがきっかけでした。まあ、やってみるか北海道に戻り、その後道立高校の教員になって斜里、遠軽郁陵、札幌白陵、砂川と経験してきて母校に戻ったということです。初めから放送局を指導していたわけではなく、遠軽時代に機械に詳しくさうだからと放送局を担当させられました。

指導は全くの我流です。ただ、生徒には「知らないことを自分で調べて発表しなさい」とは言っています。研究論文と同じで、テーマは同じであってもいいのです。でも他の人の論文の焼き直しは価値がありません。仮説を立て検証を進めていく中でオリジナリティーを出していなくてはなりません。作品作りもオリジナリティーが肝心で、自分で足を運ぶことを惜しんでは駄目なのです。



インタビュー

キラリ

陸上棒高跳びでインターハイ出場

陸上競技部 2-4 内藤 琉杏 さん



【棒高跳びのポーズ】

7月29日から福井県で行われたインターハイに棒高跳びで出場した内藤さんは「北海道を離れたのが初めてだったのでドキドキしました。飛行機も初めてでしたが、雲を突き抜けた時の真っ青な空と雲がどこまでも広がる光景に感動しました」と目をキラキラさせながら話してくれました。小学校でずっと器械体操をやっていたのが、中学では陸

上短距離で全道2位。中2の時に競技場で練習をしていた棒高跳びを見て「面白そうだな。体操をやっていた自分ならできかも」と思い、高校入学時にすぐ顧問の高澤先生に申し出たそうです。「やってみると難しかった」とは言うものの、コロナで大会が開催されなかった間に地道に練習を重ねて、初めての大会でバーを超えることに成功。その瞬間はよく覚えているそうで、「バーを越して、ポールを離す。落ちていきながら『やった〜』って。本当に気持ちよ

かったです」と話してくれました。

福井は暑い上に湿気があり、黙っていても汗が滝のように噴き出してきたそうで、「何もかもが初めての経験だったのですが、あの暑さには参りました」と言いつつ、「競技には集中できたのですが、インターハイのスタートのバーの高さが自分が届いたこともない高さで、その場にいること自体恥ずかしかったです。早く3回失敗してこの場を離れたいとさえ思っていました。でも、絶対バーに届いてみせろと思ってチャレンジしたら、2回目は届いたんです。結局記録無しで終わって、観客席から見てたのですが、自分と同じ高校生が4mを跳んでいる。それを見てたら自分も跳べるような気がしてきて、ものすごく前向きな気持ちになれました」と振り返ってくれました。今後については「今年中に3mを跳んで、冬にしっかり体の基礎を鍛えていきます。そして来年は全道で優勝して、絶対インターハイで記録を残したいです！」と抱負を語ってくれました。

将来は、世界中の美しい風景を見て回る旅がしたい、という内藤さん。その明るさと前向きにとらえていく人間力がとても魅力的でした。これからも頑張ってください。

三条高校で輝いている生徒を紹介します。インタビュアーは校長です。